川越敏孝著
回想――戦中・戦後の日中関係を生きて
〈岩波ブックセンター、二〇一五年六月、六一六頁〉

かねてから日本共産党と中国共産党――党と党という公式的な関係もさることながら、野坂参三、徳田球一、伊藤律など日共中枢と中共の個人的因縁、彼らの中国における振る舞いに興味を持っていただけに、期待を膨らませ本書を開いた。だが前半の三分の一ほどには、没落した商家に生まれ、教育熱心な両親の下で育ち、京都大学経済学部を卒業し、大蔵省に入り、応召し中国戦線に赴き、ロシア語学習を命じられ、敗戦の混乱期に帰国列車に乗り遅れ、中国に留まり、八路軍に加わる――など、著者の前半生が淡々と綴られているだけ。あまり面白くない。

ところが、である。五〇年代初期、瀋陽から北京に移り、著者自らが「自由意思による入党ではない」とはいうものの、「日本共産党中央の「北京機関」という」非公然組織に加わった辺りから、やや不謹慎な表現ながら、面白さは一気にヒートアップする。

著者が北京で接した「中央指導者」は「丁（野坂参三）、顧（伊藤律）、林（西沢隆二）、何（聴濤克巳）、周（土橋一吉）」。「孫さん」を名乗った徳田球一、「郭さん」こと袴田里見、紺野与次郎、河田賢治、宮本太郎、安斉庫治、高倉テルなど。彼らの日々の生活ぶりや人間模様が描かれ、日本における彼らの活動歴や後に日共が下すことになる公式的評価と重ね合わせてみると、その〝落差〟に興味は湧くばかりだ。

五三年一〇月の徳田書記長の死の翌年になると、「北京機関の動きが、にわかにあわただしくなってきた」。五五年末に日共は「六全協」（第六回全国協議会）を開き、野坂、袴田、紺野、西沢などが常任幹部に選任され日本に戻って行った。

その後、著者は一貫して「外文出版社」に勤務し、やがて「日共北京細胞」を結成する。ここで「「日共北京細胞」の私たちが、中国における中国共産党の指導を尊重するという問題」が生じてきた。ことに五七年に著者が「在北京『アカハタ』通信員も兼務せよ」と日共中央に命ぜられた辺りから、日共と中共の狭間で、著者は微妙な立場に置かれることとなる。「あれほど信頼していた中国共産党が、「左傾」の誤りを犯すようになった」からである。

以後、中ソ対立から文革へと日中両共産党の対立が表面化するに従って、著者の参加する「北京細胞」は「日共に造反」する。陰の指導者は徳田夫人らしい。そこに「「日共四川グループ」とでも称すべき、陰の一団」が「北京に忽然と姿を現し、私たちに挨拶もないまま、日共代表と勝手に理論闘争をしたり、中国の紅衛兵を親しく付き合ったり」。

著者の草稿等が親族の手で時系列に沿って編集された本書は、党と党の軋轢や激動の歴史の渦中に生きた一日本人の記録として貴重だ。（樋泉克夫）